

開催地名	東京都福生市
開催日時	令和5年11月23日（木） 10：00 ～ 11：15
開催場所	福生市民会館
語り部	太田 千尋 （宮城県仙台市）
参加者	福生市、羽村市、瑞穂町 各消防団・自主防災組織 120 名
開催経緯	現在、いつ何時でも起こりうる災害に対して少しでも軽減するため、自主防災組織のコミュニティにおいて防災意識の向上を図る必要がある。特に、被災地での実体験の話を聞く機会は少ないので、災害時で実際に起り得ることや対応策検討などを防災知識の習得を目的としている。
内容	（１） はじめに 東日本大震災発生時、仙台市消防局に勤務していた。大津波が襲ってきたときに、ヘリコプターテレビ中継システムから発せられる「街が流れている」という言葉から想像できなかったが、実際の映像を観て驚愕した。そして、仙台市の死者・行方不明数は九百数十名にものぼった。なお、その仙台市は津波を被災したエリアの5%の方が亡くなったというデータがあるが、30～40%の方が命を落とした他の地域も存在する。津波は海から4～5キロ程も内陸に遡上した。一般的には、「徒歩で避難」と言われるが、徒歩で逃げられる距離ではない。その土地その土地に適した逃げ方があると思われる。津波の怖さや防災の大切さや正しい知識を持つことが一番の被害の軽減につながる。私は津波のみならず、洪水・土砂災害などの被害が少しでも減ることを願って日々話をしている。 （２） 東日本大震災を経験して 東日本大震災はマグニチュード9の巨大地震であり、約6分間続いた。仙台市内の家屋は、全壊3万棟・大規模損半壊2万7千棟・半壊一部損壊8万棟であった。これだけの被害が出たにもかかわらず、建物による圧死は記録にない。それは将来起こりうる宮城県沖地震への官民挙げての備えができていたことが主な理由で、大震災の発生時に多くの人々が感じたことが「やっぱり地震がきた！」であった。なお、その宮城県沖地震はマグニチュード7.8～8想定で規模は小さいが予測される死者数は87名であった。よって、東日本大震災の地震による人的被害に関しては最小限に抑えられたと言える。災害の被害は軽減することが可能のため、常日頃からの市民への啓発や自主防災組織からのアドバイスが大変重要である。 また、住んでいる土地（地盤）によって地震の被害が異なるため注意が必要だ。特に

	昭和初期と現在の地図を比較すると、昭和初期には人が住んでいなかった場所、例えば谷や池などを埋め立て、団地・宅地などを造成した。よって、昔の地形をよく確認し、自分がどのような土地に住んでいるかを知ることは非常に大切である。 11月5日は「津波防災の日」であり、その前後は防災訓練が行われる。仙台市では中学生が自発的に津波訓練に参加している地域がある。 実際に東日本大震災の際は防災訓練に参加した中学生の活躍で大いに助かった地域のマンションもあった。防災訓練をとおして防災の芽は育つものである。 震災後の仙台市内には、車いすで登れる津波避難タワーが各地に作られた。その中には、毛布・無線・浮き輪・デジタル防災行政無線・中身は救命胴衣になる座布団などが備蓄されている。また、災害公営復興住宅も整備されている。 (3) 最後に 私は東日本大震災直後に部下職員の勤務表を作成した。この震災が普通の地震ではないことを感じ長期戦を予測したためである。その意図は「組織の100%の能力をいかに長期間持続できる体制を作るか」であった。職員や自主防災組織の方は、精神的に興奮状態になる為、どうしても寝る間も惜しんで働いてしまい、結果、体調を崩し脱落してしまうケースが発生してしまう場合がある。組織として100%の能力を長期間継続して能力を発揮できる環境を作ることが可能なのは、現場を管理監督する立場の方である。一人でも多くの方々を助けるためにも、労務管理（健康管理）もしっかり行っていただきたい。  
開催地より	東日本大震災を経験された語り部から当時の被害状況や心境を伺うことができた。当協議会では今回の公演を踏まえ、自主防災組織や消防団で自助・共助の強化、個人の防災意識の向上を図っていききたい。